様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月 １６ 日現在

機関番号：３４３１５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ０４３２４

研究課題名（和文）人の生の潜在性と可能性に接近するTEA―文化をとらえ、分岐をつくる

研究課題名（英文）Qualitative research methodology of Trajectory Equifinality Approach to grasp potentiality and possibility: with visualizing culture and generating bifurcation

研究代表者
安田　裕子（Yasuda, Yuko）

立命館大学・総合心理学部・准教授

研究者番号：２０４３７１８０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：TEAの理論的探究と教育実践的リサーチを推進した。理論的探究の成果は、データ分析検討会による分析法の議論、TEA国際学会の創設、『TEMで広がる社会実装―ライフの充実を支援する』（2017年、安田裕子・サトウタツヤ編著）の刊行、分岐点分析による促進的記号や援助者としての発達・変容の把握を扱う書籍などの刊行に向けた企画・準備、であった。教育実践的リサーチの成果は、自らのキャリアの振り返りを行いながらTEAについて学ぶ講習会や、TEAに対話的自己論を組み入れ開発された「キャリアワークシート」（番田清美氏開発）を活用した、キャリア・アイデンティティ形成を促すワークの試行とその有用性の検討、であった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
「今」を生きつつ自らの唯一無二の径路を生み出す存在である人間のライフのありように、「分岐点」の概念をもとに迫ることで、見えにくさ、人生に埋め込まれた可能性と潜在性、そうした様相を下支えする文化や関係性、また、未来展望を多様にあぶり出すことができる。加えて、必要な社会的支援や制度変革の検討につなげていくことができる。同時に、質的研究法TEAの理論面での整備とともに、社会実践・実装への展開を含めた精緻化を推進するものである。語られなさの可視化ともむすびつき、TEA×ナラティヴ・アプローチによる経験・現象への接近と質的研究法の斬新かつ挑戦的な探究という、拓かれた方法論上の展開可能性をあわせもつ。

研究成果の概要（英文）：I promoted theoretical exploration and educational practical research of TEA. The results of theoretical exploration include promotion of examination by the Data Analysis Study Group, establishment of the TEA International Association, publication of “Social Implementation Expanded by TEM: Supporting the Enhancement of Life” (2017, edited by Yuko Yasuda and Tatsuya Sato). Furthermore I planned and prepared the publication of a book on TEA focusing on grasping promoter signs by Bifurcation Point analysis and the development and transformation as a supporter. The results of educational practical research include short courses about TEA while looking back on his/her own career and educational practical work that utilizes a "Career Worksheet" (developed by Kiyomi Banda), which was developed by incorporating Dialogical Self Theory(DST) into TEA. It was a trial of educational practical work that encourages identity formation and I examined of its usefulness.

研究分野：臨床心理学、生涯発達心理学

キーワード：質的研究法TEA　分岐点　文化　促進的記号　変容と維持　介入・支援　キャリア　社会実装

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

(1) 複線径路等至性アプローチにおける「分岐点」への着目

複線径路等至性アプローチ（Trajectory Equifinality Approach: TEA）は、等至性の概念を取り込み、時間と文化的・社会的文脈に留意して過程と発生をとらえる、文化心理学に依拠した質的研究法として開発された。等至性は、異なる道を経てもあるありように等しく至ることを意味する。人の生の歩みは轍（わだち）のようなものとしてとらえられ、TEA では、人の生涯にわたる発達や人生の径路を、多様であり複線性が潜在する、今後に可能性が拓かれているものとして理解する。もっとも、径路の幅や選択の自由度は文化的・社会的な制約下にある。すなわち、人は、可視／不可視の文化的・社会的諸力（社会的方向づけ（Social Direction: SD）、社会的助勢（Social Guidance: SG）と概念化されている）を受けながら今を生きる存在である。言い換えれば、人の生は、時間の持続と諸力のせめぎあいとともにあるなかで分岐が生じるのである。

TEA では、等至点を設定する対象選定の理論（歴史的構造化ご招待 Historically Structured Inviting: HSI）と径路を描くための分析枠組み（複線径路等至性モデリング Trajectory Equifinality Modeling: TEM）とともに、自己の内的変容を捉える理論（発生の三層モデル Three Layers Model of Genesis: TLMG）が理論化されている。分岐点においていかなる変容がとらえられるかという観点から、TLMG による分析がなされる。この分析は、行動や選択のありようを、信念・価値との関連と、そこに媒介する促進的記号により把握することで、自己の変容･維持過程をとらえるものであり､さらに対話的自己理論との理論的接合が検討されてもきた。すなわち、分岐点をとらえるうえで、SD と SG といった外的・環境的な諸力のせめぎあいと内的・関係論的な自己内対話とをあわせて分析することが、有用であることが認識されている（Yasuda, 2015）。

(2) 促進的/抑制的記号の振る舞いへの留意

Yasuda（2015）はあわせて、高次精神機能をもつ人間にとっての記号の重要性を強調している。記号を認識できる人間だからこそ、分岐点を創りだすことができるのである。記号の発生は TLMG に組み込まれた考え方である一方で、折しも、そのとらえ方の難しさが、継続的に行っている研究会を通じて明らかになってもいた。記号は文化の表象であり、文化心理学に依拠していることを謳えばなお、促進的記号（Promoter Sign: PS）ならびに抑制的記号（Inhibitor Sign: IS）の振る舞いを探究することの重要性が認識された。

(3) 変容を促す他者への留意

TEA は質的研究法として開発されたが、分析に際しては、手順主義に陥ることなく現象を丁寧にとらえるための思考枠組みとしての活用が推奨されるなかで、実践的に応用されるようになった。たとえば、社会人を対象としたキャリア支援のワークや、保育士の子ども支援過程やセラピストによるセラピー過程のリフレクションなどに、である。このことは、研究分析法としてのみならず、実践的な仕様への TEA の転用可能性を明らかにするとともに、語りを含め行動の変容がとらえられる分岐点における、他者の存在ならびにその関与・介入・支援のありようへの意識化につながった。

(4) 未来展望という観点の導入

インタビューでは、収集されたデータは回顧的なものにならざるをえないが、TEA の共同開発者であるデンマーク・オールボー大学のヤーン・ヴァルシナー教授は常に、TEA で描く径路に未来志向性を担保することの重要性を指摘する。もっとも、語りは、過去への振り返りと同時に現在を紡ぎ未来へと投企するものであり、そこには未来への展望が含みこまれている。TEA ユーザーのなかには、未来展望に焦点をあて、青年期にある学生や社会人へのキャリア支援として語りを用いたワークを開発し、試行錯誤的に実践上の精緻化をはかっている人もいる。

＜引用文献＞

Yasuda, Y.(2015). Discussant：Selves are grasped in relation to Promoter Sign/Inhibitor Sign and Social Direction/Social Guidance. 17th European Conference on Developmental Psychology. Portugal.

２．研究の目的

(1) ＜現在＞選択・意思決定のメカニズムの知見化—分岐点のモデル提示（上記(1)(2)より）

TEA は、諸概念を共通言語に、多学問領域を横断して広く質的分析に活用されている。たとえば分岐点の概念は、径路を分かつ変容の機微を明らかにするうえで有用である。逆に言えば、TEA でとらえられる変容のバリエーションを集積することで、分岐点の分析例を含め、同様の経験をする人への選択や意思決定に役立つモデルを提供することができる。

(2) ＜過去-現在＞伴走する支援者への焦点化—介入と場の変容への接近（上記(2)(3)より）

支援者のありようを対象者の変容とあわせてとらえることは、とりわけ教育的・臨床的テーマにおいて重要である。これまでも支援者の存在は、分岐点などにおいて SG や SD によって描出されてきた。加えて、支援者の時間的変容に着目し、対象者の変容プロセスとともに可視化する

ことで、介入の様相を抽出しつつ当該システムないしはコミュニティの変容に接近することができる。なお、支援者とは、職業専門家のみならず親などの身近な他者を含んでいる。

(3) ＜現在-未来＞未来径路の潜在性と可能性の可視化—キャリア教育の推進（上記(3)(4)より）：
径路の多様性・複線性を重視する TEA の考え方は、未来に拓かれるキャリアの形成を考えるうえで有用である。とりわけ、実社会へと羽ばたこうとする大学生が、自分自身の今後を思考し志向する機会は重要である。それは就職活動に限られるものではなく、キャリア教育としての展開が求められることである。青年が自身の未来を展望できるような、大学におけるキャリア教育の確立を見据え、その基盤形成を行う。

３．研究の方法

「TEA の理論的探究」と「TEA による実践的試行」の 2 本柱における成果産出を、研究的営みと教育的営みを循環させつつ目指すものである。具体的には次の通りである。

理論的探究／「分岐点のモデル提示」「介入と場の変容への接近」:「分岐点で何が起こっているか」「介入がどうなされシステムやコミュニティがいかに変容しているか」ということは、異なる学問領域や現象に共有可能な問いであり、その分析モデルのバリエーションを集積する。TEA は心理学を越えて、社会学、保育学、看護学、経営学など多学問領域にまたがって活用されており、広く厚い実質的な研究ネットワーク基盤により推進する。協働的な研究活動は、同時に、研究法を学びあう教育的機能もあわせもつ。

実践的試行／「キャリアワークの推進」大学生を対象に、TEA 理論を援用したキャリアワークショップを開催する。

４．研究成果

(1) 理論的探究「分岐点モデル提示」「介入と場の変容への接近」

①データ分析検討会を、横浜、京都、東京、大阪、名古屋、沖縄にて実施した。発生と過程の観点から、現象をとらえる多種の研究に関して、分岐点で何が起こっているのか、どのような諸力（SD や SG）が作用しているのか、いかなる変容がとらえられたのか、といった観点から、議論・検討を行った。臨床心理学や発達心理学、保育学や社会福祉学など、対人援助を志向する研究では､分岐点においていかに支援･介入をなしうるかという観点からの考察もなされた。また、2 日間に及ぶ TEA 合宿講座を立命館大学で開催し、データ分析実習を含む質的研究法 TEA の実践的・協働的な学びの場を提供した。そして、国際対話的自己学会や TEA 国際学会（後述）などで、TEA に対話的自己の理論を組み入れつつ分岐点に関する検討を進めた。

②『TEM で広がる社会実装―ライフの充実を支援する』(2017 年、安田裕子・サトウタツヤ（編著)）を刊行した。

③TEA 国際学会を、TEA の共同開発者である研究分担者のサトウタツヤ教授（立命館大学）とともに立ち上げ、同じく当研究法の共同研究者である Jaan Valsiner 教授（デンマーク・オールボー大学）も来日し、第１回大会を開催した（2019 年 3 月 2-3 日、立命館大学)。

④保育、看護、心理など対人援助を対象に、その変容プロセスを可視化しつつ、「文化をいかにしてとらえたか」「分岐点分析により促進的記号がいかにとらえられたか」「援助者としての発達・変容をいかにしてとらえたか」などに焦点化した知見を発信するべく書籍の刊行を企画し準備を進めた。また、TEM 図のモデル集積に向けて、監修の立場で書籍刊行に関与した。

(2) 実践的施行「キャリアワークの推進」

①自分自身のキャリアの振り返りを行いながら TEA について学ぶ講習会を、複数の学会（日本パーソナリティ心理学会（2018 年 8 月 26 日)、日本心理学会（2018 年 9 月 26 日、2019 年 9 月 11 日)、TEA 国際学会（2019 年 3 月 3 日)）などで実施した。

②キャリアを描くワークを取り入れ PBL 形式により組み立てた TEA の講習会の成果を、共同研究としてまとめポスター発表を行い、さらなる検討を進めた。

③研究協力者の豊田香氏が開発した「未来等至点ワークショップ」を豊田氏とともに企画・開催した。自分自身の職業の未来の到達点をイメージし、新たなキャリア展望を得ることを目的とする「未来等至点ワークショップ」は、TEA を用いたキャリア展望のワークショップである。

④研究協力者の番田清美氏が開発した、TEA に DST（Dialogical Self Theory：対話的自己論）を組み入れ開発された「キャリアワークシート」を活用した、キャリア・アイデンティティ形成をうながす教育実践的リサーチを、番田氏とともに行った。そして、青年期大学生の個人史の振り返りがそのキャリア発達・展望にどのよう有用かを検討した。結果、過去から現在に向かう「自己の持続と変容の発見」、現在から生じる「未来への志向」、未来へ向かう分岐点として「自己への動機づけ」、生成される分岐点として「外的な力の自己への取り込み」がとらえられた。本実践は、自らの来歴が現在につながっていることを当人に意識化させる役割を果たすとともに、青年期というアイデンティティに揺れる現在へのとまどいを浮き彫りにし、未来を展望する視点を与える可能性を有すると考えられた。また、「キャリアワークシート」を構成する「I-position シート」（分岐点における自己の対話的な様相を「パーソナル‐ソーシャル」×「ポジティブ‐ネガティブ」による 4 象限でとらえるもの）には、自己の動的な多面性が描き込まれ、その有用性が示唆された。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計12件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 田中晶子・安田裕子・上宮愛・片岡笑美子・鈴木聡・西部智子・仲真紀子	４．巻 19（1）
２．論文標題 法と心理学会第19回大会 ワークショップ 虐待を受けた子どもへの包括的支援を考える―「捜査とケア」二者択一から両立へ	５．発行年 2019年
３．雑誌名 法と心理	６．最初と最後の頁 47-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 田中晶子・安田裕子・上宮愛	４．巻 21（3）
２．論文標題 司法面接と心身のケアの連携を促進する研修プログラムの開発	５．発行年 2019年
３．雑誌名 子どもの虐待とネグレクト	６．最初と最後の頁 365-368
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 隅本雅友・安田裕子・斎藤進也・神崎真実・菅井育子・サトウタツヤ	４．巻 41
２．論文標題 「ものづくり」に質的研究はどう貢献できるか？― ものづくり質的研究の構想について	５．発行年 2020年
３．雑誌名 立命館人間科学研究	６．最初と最後の頁 29-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Banda, K., Sato, T., Yasuda, Y., Toyoda, Y., & Sugimori, S.	４．巻 12
２．論文標題 Career Development during the School-to-Work Transition among the Students of Middle-Ranked Universities in Japan	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Journal of Asian Vocational Education and Training	６．最初と最後の頁 ー
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 サトウタツヤ	4．巻 11
2．論文標題 心理学史におけるナラティヴの役割	5．発行年 2020年
3．雑誌名 N：ナラティヴとケア	6．最初と最後の頁 11-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 1884-6343	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 斎藤進也・安田裕子・隅本雅友・菅井育子・サトウタツヤ	4．巻 38
2．論文標題 質的データの可視化支援ツール「NARREX」の開発―KJ法経由のTEMとそれをサポートする方法について	5．発行年 2019年
3．雑誌名 立命館人間科学研究	6．最初と最後の頁 111-120
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 安田裕子	4．巻 28（1）
2．論文標題 体外受精適応となった女性の不妊経験への意味づけ過程―複線径路等至性モデリングを用いて（特集 リプロダクションの経験と保健医療）	5．発行年 2017年
3．雑誌名 保健医療社会学論集	6．最初と最後の頁 12-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 安田裕子	4．巻 8
2．論文標題 書評「抱井尚子（2015）混合研究法入門―質と量による統合のアート 医学書院」	5．発行年 2016年
3．雑誌名 質的心理学フォーラム	6．最初と最後の頁 104-105
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 松本克美・金成恩・安田裕子	4．巻 16（1）
2．論文標題 法と心理学会第16回大会 ワークショップ 児童期の性的虐待被害とその回復をめぐる法心理2―ドイツ・韓国調査の報告（指定討論―臨床心理学的観点から）	5．発行年 2016年
3．雑誌名 法と心理	6．最初と最後の頁 69-74
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 羽渕由子・赤嶺亜紀・安田裕子・田中晶子・仲真紀子・三原恵・主田英之	4．巻 17（1）
2．論文標題 法と心理学会第17回大会 ワークショップ 多専門・多職種連携による司法面接の展開―通達からの１年を振り返り、今後の展開を考える	5．発行年 2017年
3．雑誌名 法と心理	6．最初と最後の頁 47-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 妹尾麻美・孫怡・肥後克己・神崎真実・中田友貴・川本静香・岡本尚子・安田裕子・サトウタツヤ・鈴木華子・矢藤優子	4．巻 26（2）
2．論文標題 特集：「いばらきコホート調査」の紹介 「いばらきコホート調査」における調査設計と概要	5．発行年 2020年
3．雑誌名 日本保健福祉学会誌	6．最初と最後の頁 3-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 神崎真実・川本静香・妹尾麻美・中田友貴・肥後克己・孫怡・岡本尚子・安田裕子・サトウタツヤ・鈴木華子・矢藤優子	4．巻 26（2）
2．論文標題 特集：「いばらきコホート調査」の紹介 「いばらきコホート調査」における倫理的配慮	5．発行年 2020年
3．雑誌名 日本保健福祉学会誌	6．最初と最後の頁 15-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計43件（うち招待講演　0件／うち国際学会　6件）

1．発表者名 安田裕子
2．発表標題 複線径路等至性アプローチ（TEA）―過程と発生をとらえる質的研究法
3．学会等名 日本パーソナリティ心理学会第27回大会
4．発表年 2018年

1．発表者名 矢藤優子・サトウタツヤ・岡本尚子・安田裕子・鈴木華子・川本静香・神崎真実・中田友貴・肥後克己・孫怡・妹尾麻美
2．発表標題 学融的な人間科学の構築と科学的根拠に基づく対人援助の再編成―人間性（人格性）成長の一貫性を前提としたパーソナリティの探求へ向けて
3．学会等名 日本パーソナリティ心理学会第27回大会
4．発表年 2018年

1．発表者名 柾木史子・豊田香・安田裕子・サトウタツヤ
2．発表標題 教育における文化的視点の重要性―Trajectory Equifinality Approach（TEA）による分析
3．学会等名 日本教育心理学会第60回総会
4．発表年 2018年

1．発表者名 安田裕子・サトウタツヤ・伊東美智子・北出慶子
2．発表標題 人の生の歩みとその可能性を拓く―潜在的な分岐を可視化・実現する、文化心理学に依拠する質的方法論TEA
3．学会等名 日本心理学会第82回大会
4．発表年 2018年

１．発表者名 サトウタツヤ・安田裕子
２．発表標題 TEM（複線径路等至性モデリング）を学ぶ
３．学会等名 日本心理学会第82回大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 田中晶子・安田裕子・上宮愛・片岡笑美子・鈴木聡・西部智子・仲真紀子
２．発表標題 虐待を受けた子どもの包括的支援を考える「捜査とケア」二者択一から、両立へ
３．学会等名 法と心理学会第19回大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 妹尾麻美・三品拓人・安田裕子
２．発表標題 妊娠期女性の職業キャリア展望
３．学会等名 日本質的心理学会第15回大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 三品拓人・妹尾麻美・安田裕子
２．発表標題 家庭内において妻が夫に対して担っている「感覚的活動」
３．学会等名 日本質的心理学会第15回大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 田中文昭・張暁紅・浅瀬万里子・土元哲平・神崎真実・菅井育子・隅本雅友・安田裕子・サトウタツヤ
２．発表標題 「大学生のやる気はなぜなくなるのか？」複線径路等至性モデリング（TEM）による検討―マツダ株式会社・立命館大学による共同研究「質的研究アナリスト育成プログラムの開発」による体験型プログラムTEM院生版PBLからの学び
３．学会等名 日本質的心理学会第15回大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 岡野雄気・若杉美穂・菱ヶ江惠子・土元哲平・神崎真実・菅井育子・隅本雅友・安田裕子・サトウタツヤ
２．発表標題 大学生のやる気はなぜなくなるのか？どのようにしてなくならないようにできるのか？―TEAによる検討
３．学会等名 日本質的心理学会第15回大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 安田裕子
２．発表標題 TEA（複線径路等至性アプローチ）の可能性―「発達」と「文化」をとらえるということ
３．学会等名 The 1st Transnational Meeting on TEA（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 安田裕子・Jaan Valsiner・大川聡子・北出慶子・香曽我部琢・森直久・森岡正芳・滑田明暢・サトウタツヤ
２．発表標題 記念シンポジウム TEA（複線径路等至性アプローチ）が切り開く未来
３．学会等名 The 1st Transnational Meeting on TEA（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 安田裕子・福田茉莉
２．発表標題 人生径路・発達の複線性と文化をとらえるTEA（複線径路等至性アプローチ）
３．学会等名 The 1st Transnational Meeting on TEA（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 矢藤優子・孫怡・岡本尚子・安田裕子・川本静香・鈴木華子・板倉昭二
２．発表標題 学融的な人間科学の構築と科学的根拠に基づく対人援助の再編成
３．学会等名 日本発達心理学会第30回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 伊東美智子・安田裕子・大野志保・中本明世・林田一子・大川聡子
２．発表標題 看護学にTEM/TEA（複線径路等至性モデリング/アプローチ）はどう貢献できるか？
３．学会等名 日本看護学教育学会第27回学術集会
４．発表年 2017年

１．発表者名 豊田香・北出慶子・伊東美智子・大川満里子・サトウタツヤ・安田裕子
２．発表標題 「TEMで広がる社会実装」の可能性
３．学会等名 日本質的心理学会第14回大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 中坪史典・境愛一郎・保木井哲史・サトウタツヤ・安田裕子
２．発表標題 TEMが拓く保育者の子ども理解と専門家としての育ち合い―「協働型」園内研修をデザインする
３．学会等名 日本発達心理学会第29回大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 近藤恵・川島大輔・安田裕子・白神敬介・岡本祐子・浦田悠
２．発表標題 ライフサイクルの関係性から死生を読み解く―死生心理学の展開（1）
３．学会等名 日本発達心理学会第27回大会
４．発表年 2016年

１．発表者名 Yasuda, Y.
２．発表標題 Troubles and tasks of the support for victims received damage of domestic violence (DV): Toward the view to support lives of sufferers in community
３．学会等名 the 31st International Congress of Psychology ICP2016（国際学会）
４．発表年 2016年

１．発表者名 森岡正芳・安田裕子
２．発表標題 質的研究法入門―生きた実践研究を作る
３．学会等名 日本人間性心理学会第35回大会
４．発表年 2016年

１．発表者名 安田裕子
２．発表標題 座長 質的研究の産業心理臨床実践における有用性―日常の心理臨床実践に繋げるために（新田泰生）
３．学会等名 日本人間性心理学会第35回大会
４．発表年 2016年

１．発表者名 Konopka, A. , van Beers, W. , Morioka, M. , Sato, T. , Nameda, A. , & Yasuda, Y.
２．発表標題 Diachronic and synchronic approaches in Compositionwork in relation to changes in the self. A dialogue between TEA and MA in Compositionwork
３．学会等名 the 9th International Conference on the Dialogical Self（国際学会）
４．発表年 2016年

１．発表者名 Sato, T. , Konopka, A. , Banda, K. , Yasuda, Y. , & Tajima A.
２．発表標題 The Experience of bifurcation point: Where DS and TEA meets
３．学会等名 the 9th International Conference on the Dialogical Self（国際学会）
４．発表年 2016年

１．発表者名 羽渕由子・赤嶺亜紀・安田裕子・田中晶子・仲真紀子・三原恵・主田英之
２．発表標題 多専門・多職種連携による司法面接の展開―通達からの１年を振り返り、今後の展開を考える
３．学会等名 法と心理学会第17回大会
４．発表年 2016年

１．発表者名 廣井亮一・村瀬嘉代子・二宮周平・山口直也・安田裕子
２．発表標題 公開シンポジウム 子どもをめぐる法と心理臨床
３．学会等名 法と心理学会第17回大会
４．発表年 2016年

１．発表者名 安田裕子・サトウタツヤ・番田清美・柾木史子
２．発表標題 キャリアの選択と形成―複線径路等至性アプローチを生かした生涯にわたる教育と発達支援
３．学会等名 日本発達心理学会第28回大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 安田裕子・上宮愛・田中晶子
２．発表標題 司法面接における多職種連携―心身のケアの視点をとりこんで
３．学会等名 日本心理臨床学会第38回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 肥後克己・岡本尚子・孫怡・妹尾麻美・神崎真実・川本静香・中田友貴・矢藤優子・安田裕子・サトウタツヤ・鈴木華子
２．発表標題 唾液指標を用いた妊娠期女性のストレス状態についての検討
３．学会等名 第37回日本生理心理学会大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Yasuda, Y.
２．発表標題 What happens on ‘Bifurcation Points’: Based on the methodology of Trajectory Equifinality Approach (TEA)
３．学会等名 the 18th International Society for Theoretical Psychology
４．発表年 2019年

１．発表者名 安田裕子・サトウタツヤ
２．発表標題 複線径路等至性アプローチ（Trajectory Equifinality Approach: TEA）を学ぶ―実践編
３．学会等名 日本心理学会第83回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 サトウタツヤ・安田裕子
２．発表標題 複線径路等至性アプローチ（Trajectory Equifinality Approach: TEA）を学ぶ―理論編
３．学会等名 日本心理学会第83回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 安田裕子・サトウタツヤ・隅本雅友・斎藤進也・川野健治・宮下太陽・神崎真実
２．発表標題 未来志向のものづくり―質的なアプローチがなせること
３．学会等名 日本心理学会第83回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 羽渕由子・上宮愛・安田裕子・赤嶺亜紀・佐々木真吾・仲真紀子・田中周子・田中晶子
２．発表標題 子どもから話をきく方法―司法面接（NICHDガイドライン）を学ぼう（1）
３．学会等名 日本心理学会第83回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 羽渕由子・仲真紀子・田中周子・上宮愛・佐々木真吾・田中晶子・安田裕子・赤嶺亜紀
２．発表標題 子どもから話をきく方法―司法面接（NICHDガイドライン）を学ぼう（2）
３．学会等名 日本心理学会第83回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 羽渕由子・田中晶子・安田裕子・田中周子・赤嶺亜紀・上宮愛・仲真紀子・佐々木真吾
２．発表標題 子どもから話をきく方法―司法面接（NICHDガイドライン）を学ぼう（3）
３．学会等名 日本心理学会第83回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 安田裕子・Jaan Valsiner・土元哲平・宮下太陽・小澤伊久美・伴野崇生・滑田明暢・サトウタツヤ
２．発表標題 全体会 EVERYTHING IS ALL RIGHT WITH TEA (as long as it keeps developing)（あらゆることがTEAと共にあって良い（それが発達し続けている限りにおいて））
３．学会等名 The 2nd Transnational Meeting on TEA（第2回TEA国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 安田裕子・番田清美
２．発表標題 TEAとDSTを用いた「キャリアワークシート」の教育実践―語りへの接近
３．学会等名 日本質的心理学会第16回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 妹尾麻美・三品拓人・安田裕子
２．発表標題 子育て中の妊娠女性における生活の困難
３．学会等名 日本質的心理学会第16回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 隅本雅友・菅井育子・神崎真実・斎藤進也・安田裕子・サトウタツヤ
２．発表標題 ものづくりと質的研究方法論の再考―「ものづくり」から見た質的研究の期待と展望
３．学会等名 日本質的心理学会第16回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 菅井育子・隅本雅友・神崎真実・斎藤進也・安田裕子・サトウタツヤ
２．発表標題 自動車・顧客を対象としたTEA（Trajectory Equifinality Approach）―質的分析による未来ものづくりの可能性
３．学会等名 日本質的心理学会第16回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 神崎真実・菅井育子・隅本雅友・斎藤進也・安田裕子・サトウタツヤ
２．発表標題 質的研究（TEM）の実習デザイン―5日間で伝わること・伝わらないこと
３．学会等名 日本質的心理学会第16回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 矢藤優子・肥後克己・妹尾麻美・安田裕子・サトウタツヤ・神崎真実
２．発表標題 シームレスな対人支援に基づく人間科学の創成
３．学会等名 日本発達心理学会第31回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 香曽我部琢・中坪史典・高橋健介・境愛一郎・安田裕子・大森隆司
２．発表標題 保育カンファレンスにおける保育者の感情―視覚的ツール使用時における保育者の語りと脳機能イメージング
３．学会等名 日本発達心理学会第31回大会
４．発表年 2020年

〔図書〕　計17件

１．著者名 安田裕子	４．発行年 2019年
２．出版社 特定非営利活動法人ratik	５．総ページ数 4
３．書名 複線径路・等至性アプローチ（TEA）が拓く保育実践のリアリティ（本書が拓く新しい視角―保育実践研究がもたらすTEAの新展開）	

1．著者名 安田裕子	4．発行年 2019年
2．出版社 新曜社	5．総ページ数 7
3．書名 ワードマップ　質的研究法マッピング（TEA（複線径路等至性アプローチ））	

1．著者名 サトウ タツヤ・春日秀朗・神崎真実	4．発行年 2019年
2．出版社 新曜社	5．総ページ数 292
3．書名 ワードマップ　質的研究法マッピング	

1．著者名 Sato T.	4．発行年 2020年
2．出版社 Information Age Publishing	5．総ページ数 12
3．書名 Children and Money Cultural Developmental Psychology of Pocket Money (Birth of Trajectory Equifinality Approach (TEA) and the Pocket Money Project: Effort to Theorize the Flow of Time)	

1．著者名 Sato T., Kasuga H., & Nameda A.	4．発行年 2019年
2．出版社 Information Age Publishing	5．総ページ数 12
3．書名 Ordinary Things and Their Extraordinary Meanings (Money for Ordinary Things-Clean or Dirty? Money: Ordinary Things but Deeply Culturally Embedded Phenomenon)	

１．著者名 安田裕子・サトウタツヤ	４．発行年 2018年
２．出版社 ミネルヴァ書房	５．総ページ数 11
３．書名 質的アプローチが拓く 「協働型」園内研修をデザインする―保育者が育ち合うツールとしてのKJ法とTEM（対話を起こし、プロセス理解を支え、振り返りを促進する―質的アプローチのいかされ方）	

１．著者名 サトウタツヤ・安田裕子	４．発行年 2018年
２．出版社 ミネルヴァ書房	５．総ページ数 5
３．書名 質的アプローチが拓く 「協働型」園内研修のデザイン―保育者が育ち合うツールとしてのKJ法とTEM（本書を読み終えたみなさんへ）	

１．著者名 安田裕子	４．発行年 2019年
２．出版社 新曜社	５．総ページ数 10
３．書名 質的心理学辞典（社会実装、生殖（リプロダクション）、TEA（複線径路等至性アプローチ）、トランスビュー、妊娠・出産、発生の三層モデル、犯罪被害者、歴史的構造化ご招待）	

１．著者名 安田裕子	４．発行年 2019年
２．出版社 北大路書房	５．総ページ数 6
３．書名 メンタルヘルスの道案内―現代を生きる30章（心の生涯発達）	

１．著者名 安田裕子	４．発行年 2019年
２．出版社 北大路書房	５．総ページ数 2
３．書名 メンタルヘルスの道案内―現代を生きる30章（不妊とストレス）	

１．著者名 安田裕子・サトウタツヤ	４．発行年 2017年
２．出版社 誠信書房	５．総ページ数 15
３．書名 TEMでひろがる社会実装―ライフの充実を支援する（生みだされる分岐点―変容と維持をとらえる道具立て）	

１．著者名 安田裕子・サトウタツヤ	４．発行年 2017年
２．出版社 誠信書房	５．総ページ数 254
３．書名 TEMでひろがる社会実装―ライフの充実を支援する	

１．著者名 安田裕子	４．発行年 2017年
２．出版社 岩波書店	５．総ページ数 18
３．書名 シリーズ 刑事司法を考える 第4巻　犯罪被害者と刑事司法（子どもの司法面接とケア）	

１．著者名 安田裕子	４．発行年 2017年
２．出版社 ナカニシヤ出版	５．総ページ数 21
３．書名 教育の方法と技術―学びを育てる教室の心理学（教育実践の質的研究方法）	

１．著者名 安田裕子	４．発行年 2016年
２．出版社 福村出版	５．総ページ数 14
３．書名 夫と妻の生涯発達心理学―関係性の危機と成熟（不妊治療と夫婦関係）	

１．著者名 安田裕子	４．発行年 2016年
２．出版社 新曜社	５．総ページ数 15
３．書名 はじめての死生心理学―現代社会において、死とともに生きる（周産期・乳児期における死）	

１．著者名 Yasuda, Y.	４．発行年 2016年
２．出版社 Information Age Publishing	５．総ページ数 11
３．書名 MAKING OF THE FUTURE: The Trajectory Equifinality Approach in Culture Psychology (How can the diversity of human lives be expressed using TEM?: Depicting the experiences and choices of infertile women unable to conceive after infertility treatment)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

複線径路・等至性アプローチ
https://sites.google.com/site/kokorotem/

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	佐藤　達哉 (Sato Tatsuya) (90215806)	立命館大学・総合心理学部・教授 (34315)	